

潔さとスケールと — 進化形の駒井正人

金子 賢治 (茨城県県芸術館館長)

ポット・急須・茶器

ポット、急須、茶器。駒井正人の作るお茶を入れる器は、いろんな呼び方をされる。どれもびっぴりで、それでいてどれも言い足りない。それを全部集めて一室にできたらどんなにいいだろう、なんていうことを思っています。

それだけ、日本の伝統の急須のスタイルから、西洋風のポットの感じまで、駒井の茶器はいろんな雰囲気、気分、感覚を持っているのである。

駒井作品の中心はここところの茶器である。その形には実にいろいろなヴァリエーションがある。伝統的な常滑風の急須、ほぼ球体をなすもの、下腹型、円筒型、下母型、その逆の形、真横から見ると樽型を形成するもの。そしてそれぞれに数多々の変形がある。例えば下母型より肩が、なかなか曲線をなすものと、坂道とこの曲線を形成するもの、という具合。

後・横・上 — 取手アンサンブル

さらに取手の変化が加わる。もともと急須には、後手、横手、上手と言われる3種類の取手の形がある。駒井作品では、数多く並んだのを見てみると、取手アンサンブルでもといったような、3種類それぞれが共通合うのである。

後手とは洋ぎ口と正対側の側に取手があるもの。駒井作品でもほぼ完全円形の取手がいたものがある。横手は注ぎ口とほぼ90度につけられたもの。駒井作品では、ほとんどの取手が、一般の此の形の取手がそうであるように、先がやや広がった形に作られている。

何といってもユニークなのは上手である。これには陶器で作ったもののほかに金属製のものがある。金属には真鍮、ステンレス、銅が使われる。円形、逆三角形、逆三角形の底辺(上にくる)が曲線をなすものなどいろいろある。それが先ほど述べた形のヴァリエーションと、形だけでなく色彩でも共通する。何とも楽しい空間演出。

駒井作品の上手の取手のように、真横から見てもアクラインの美しさを印象付けられる造形は、日本の工芸の歴史の中で実にまれである。中世の根菜造の器、南部鉄器、それに桃山期前の菓子鉢、せいぜいそれくらいであろう。

かつて富本憲吉は、バーナード・リーチの取手作りのうまさを感じ入ったと書くが、やはり両者のカップに対して日本の湯呑の文化では、格段に違う取手の感覚を育ててきたのであろう。しかしその中で、根菜造の器は、大衆間の催物の食事に盛るをふるまっていた。立ったまま飲みながら給することができ

るように、とても高い取手が付いている。中まさに駒井の逆三角形の取手の原型のような形のものがある。

また南部鉄器の形は、新築の産地であった南部藩が、産業振興のため新たな技術革新を目指して京都から職人を呼び、技術・デザインの新機軸を作り出すことによって盛り上げられたものであった。それが現在にまで受け継がれ、次々と新しい、現代生活に即した鉄器を生み出すことになっている。

駒井の上手も日本人が考案した広瀬から見て逆色のない取手の一つとして評価される。しかも金属の取手も陶磁器のものと同時に、すべて後の手作りである。あの上手取手の様々な形を見てみると、いかにとも類々としてもその中に際立っている駒井の姿が彷彿として、実に微笑ましい。

黒と白

そして最後に、土の色が重要な要素として加わる。黒と白である。黒は土そのものに色を加えて作り出す。白は白磁である。しかし通常の白磁とは異なり、透明釉を後からの許容範囲の最小限に抑え、艶っぽくなく、マットでもなく、駒井ならではの「オフ・ホワイト」風の、独特の白い器が完成する。黒ももちろんいいが、この白がまたその上な食卓、休憩のお茶の時間を豊かにしてくれる。

竹刀伝説の轆轤 — 早稲田式茶術

ことほど左様に、駒井は小さい頃からの作り、いわゆる工作が大好きであったという。絵を描くことも好きであったが、立体的な工作物を作る方をより好んだ。早稲田大学芸術学部で学んだにもかかわらず、在学中から、卒業後、陶芸制作の道を進もうと決めていたという。両親もそうした駒井の決意を直ぐに見守ったのだという。

その駒井の決心には早稲田大学にある、学生のクラブ、美術倶楽部やきもの部の存在が大いに関係している。も何十年もの歴史を持っているクラブらしいが、かつては「きものは轆轤だ」という輩から(いや、思い込みか?)、轆轤修業をする後輩部員の後で、竹刀を持った先輩が現れていたという。うまくやれない後輩を、「馬」、と直筆修形の指導よろしく叩いたであろうか。さすがに2000年入学の駒井の時代にはそういうことはなく、その名前の竹刀が博物館のごとく置かれ、依頼のものが並び立てられていたらしい。

私も小さい頃、早稲田のグリーンクラブ、ビッグバンド(確か、ハイ・ソサエティ・オーケストラと言ったのではないかな)をよく聴いたことがあるが、何か、早稲田駅前の芸術的な雰囲気

の一連の流れみたいなものを感じる。

さて、確かにその竹刀伝説よろしく、駒井の轆轤技は実に美しい。それは同じ部の先輩、新屋直士、今泉毅らの作品を見ても十分うなづける。私も、轆轤作品を見るたびに、いつも「君いのに、うまい」と思っていた。

その工作好きがよく現れるのが茶こし部分の作りである。作家には誠に申し訳ないが、職場の昼食時に使っていた黒の手ポットを割ってしまった。しかしおかげで茶こし部分の見事な技術、というよりも造形の域に達しているとも言ったほうがよい、疾快な穴あき球体を完璧にみることもできたのである。造形作品として、大事に保存中である。

駒井の急須・ポット・茶器には、同じ色・材のカップ、時にはカップ・アンド・ソーサーが付いている。どちらも実に気持ちのよいものである。

香炉・土鍋・花器

また駒井作品には、それぞれ重宝と身なる円筒型、上に行くほどやや広がりいく円筒型の香炉がある。上面に規則的に配られた穴が穿たれた形のもの、同心円状のスリットが三つ

ど施されたもの、横にスリットが開けられたものなどがある。先に述べた黒土によるものである。若い世代の間で流行っているという零立てにふさわしい、モダンなスタイルを持っている。

工房で使わせてもらった大きな土鍋(まだ、制作途中)は特別注文さうである。土鍋は直火にかけるものであるため、制作上特別な配慮がいて、実にいい形にこなしてあるのが、いかに駒井風である。他の作品より大きいのが故に、轆轤の心地よいリズム感が強く出てくる。

少し前の作品になるが、直方体のものや樽型を積み上げていったような形の花器がある。駒井作品としては土鍋に匹敵するほど大きいものである。黒と白のツートンカラーで、洒落た花器に仕上がっている。

潔さとスケールと

急須・ポット・茶器、香炉、花器、土鍋。すべてに共通するスパッとした形の痕。工房も気持ちのよいほど整理されている。この潔さが、今後素直に伸びてほしいと思う。そしてもっともスケールの大きな作家に成長してもらいたいと思う。

駒井正人展

期日：2010年10月3日(日)～10日(日)
会場：目黒陶芸館別館

ギャラリー 目黒陶芸館

